

## 中国現代詩研究の現在

三木直大

中国現代文学研究者懇話会という催しが、日本中国学会の開催にあわせるようにして年に一度開催されてきている。学会前日に開催されることから、かつては前夜祭と呼びならわされていたが、毎回テーマを設定し講演や報告などを中心に、中国近現代文学の研究者の交流をはかろうという趣旨の催しである。2010年度は広島大学で第62回日本中国学会が開催されたのにあわせ、10月8日に「中国現代詩研究の現在」をテーマに開催された。準備は、開催校ということから三木が担当した。

2009年は、2月に是永駿氏の『北島詩集』（書肆山田）、9月に宇田禮氏の『艾青という詩人・中国人にとっての二十世紀』（新読書社）と中国近現代詩研究の分野での出版が続いた。また2007年から2009年にかけて、中国の企業グループ中坤集団と思潮社との共催で、日中現代詩シンポジウムと題した日中詩人のイベントが中国と日本で交互に開催されている。これには詩人の北川透氏や日本語詩集『石の記憶』（思潮社、2009）で第60回H詩賞を受賞した田原氏の力も大きいようだが、日本と中国の詩人が詩をめぐって直接交流し討論するという催しが行なわれたのである。そのシンポジウムの内容は、『現代詩手帖』の2007年11月号や2008年2月号等に掲載されている。中坤集団のリーダー黄怒波氏の詩人名は駱英で、日本では2007年の『都市流浪集』（竹内新訳、思潮社）に続き、2010年3月には『小さなウサギ』（松浦恆雄訳、思潮社）が出版されている。また2008年には、1980年代後半以降長く「流亡」の生活を続けていた詩人・北島が帰国し、香港中文大学教授に着任するという出来事もあった。

中国近現代詩をテーマとした懇話会は、『今天』20周年記念として、大阪市立大学で詩人・芒克を招いて開催された1997年以来である。すでに13年が経過している。そこで、宇田禮氏と是永駿氏にお願いし、それぞれの研究と翻訳を語っていただき、日本の中国近現代詩研究を振り返るとともに討

論の場を設けることにしたものである。プログラムは以下の通りである。

講演 1 宇田禮（詩人）「私と艾青、何其芳」

講演 2 是永駿（大阪外国語大学名誉教授）「私と北島、今天派」

当日は 14 時 30 分から 18 時前まで、両氏の講演に引き続き、池上貞子氏（跡見学園女子大学）を司会者とし三木が進行係となって、岩佐昌暉（熊本学園大学）、佐藤普美子（駒澤大学）、松浦恆雄（大阪市立大学）、渡辺新一（中央大学）等の各氏が発言し、質疑応答が行なわれた。

宇田禮氏は東京外国語大学卒。1954 年から 1959 年にかけて刊行された『北斗』（中国文学会）のメンバーでもあり、戦後日本の中国近現代詩研究の創始者の一人である。『艾青という詩人』に先行して、1994 年には『声のないところは寂寞・詩人何其芳の一生』（みすず）が出版されている。また宇田氏の講演に登場する詩「盧溝橋」は、詩集『ブナになった少年』（新読書社、2000）に収録されている。宇田氏の講演は艾青「人の皮」と何其芳「河」を中心に、氏と中国近現代詩との関わり、戦後中国近現代詩研究における文学と政治の問題、木島始や武田泰淳のことなど多岐にわたるものであった。今回、小特集として掲載した宇田禮氏の文章は、その講演原稿にもとづいている。

是永駿氏の講演は、氏と北島との関わりを中心としたものであった。講演内容は紙幅の関係もあり今回は収録できなかったが、『中国——社会と文化』第 25 号（中国社会科学学会、2010）に掲載されている 2009 年 5 月に東京大学東洋文化研究所で開催された「北島・詩朗読&シンポジウム」における講演と重なる部分も多く、是永氏は『東方』2009 年 8 月号にも「中国詩の現在に触れる——北島来日、朗読と講演から」を発表されているので、ご参照いただければと思う。

会場からは、是永氏の北島詩翻訳に関して具体的な作品を取りあげながら中国現代詩研究における翻訳の意味について詳細に検討した発言が、松浦恆雄氏によってなされた。是永氏は 1991 年に『芒克詩集』（書肆山田、1990）で、第 29 回歴程賞も受賞されている。また『馮至詩集』（土曜美術社、

1989)をはじめとする秋吉久紀夫氏の多数の翻訳詩集出版を中心とした研究の土台作りの仕事の位置づけについて、佐藤普美子氏によるまとまった発言もなされた。

宇田氏の翻訳と研究は、中国革命と中華人民共和国の成立、そして胡風批判や反右派闘争などの時代との関わりの中から出発したのもである。また、是永駿氏の翻訳と研究は、地下刊物時代の『今天』や1989年の天安門事件ときってもきれない関わりの中から生まれたものともいえる。中国近現代詩研究は、たとえ1930年代のモダニズム詩人を扱うのであっても、そうした時代性との関わりぬきには考えられない。それは「民国期の詩学課題という観点」から、馮至を始めとする中国近現代詩人を考えようとする『彼此往來の詩学』（汲古書院、2011）における佐藤普美子氏においても同じである。私を含めシンポジウムの発言者となった世代は、「文化大革命」が終わり「改革開放」が始まった1980年前後の中国で、それこそ卞之琳や馮至やといった詩人たちと直接交流できる機会にめぐりあい、それを研究の原動力のようにもした世代でもある。宇田氏が艾青と直接会うことができるようになったのもこの頃だが、しかし出発点が何であったのかを考えるなら、宇田氏の世代との間には大きな相違が横たわっている。

では、現在はどうかであろうか。日中現代詩シンポジウムに参加している中国の詩人は、歐陽江河や楊煉を始め翟永明や于堅など今天派の流れを汲む詩人たちが中心である。そんな彼らであっても、国外にいる者国内にいる者、都市にいる者地方にいる者など、その現在は多様である。だが、私たちは中国の同時代詩人たちをほとんどフォローすることができていない。この四人でいえば単行本で出版された翻訳詩集は、楊煉の『幸福なる魂の手記』（浅見洋二訳、思潮社、2005）一冊きりである。これまでも中国近現代詩に関心を持つ研究者はほんとうに少数であったが、ますますその感がある。それは岩佐昌暲氏が、会場で配付した氏作成の「最近15年（1990年～2004年）日本における中国現代詩の研究と紹介文献目録（未定稿）」などをもとに、その危惧を表明されたとおりである。中国の同時代詩人の継続的な紹介も、佐藤氏の他に、田原氏や竹内新氏の『火鍋子』を中心とした翻訳の仕事があるくらいである。

しかも私たち日本の研究者はいま、抗日戦争や中国革命や文化大革命や天安門事件やといった政治的事件とその歴史性にとられるあまり、これまでいわば視野の外におかれていた（おいていた）ともいえる、中国近現代詩に内在する民族主義的なもの（それに対して詩人がどう距離をとっているかも含めて）とどう向きあえばよいのかという課題にも直面しているように思える。それは詩人たちがどのような政治的スタンスに立つかに関わらずである。そしてその民族主義的なものには、詩の創作過程における「中国語」という言語のあり方を、「母語」や「母国語」としてあたかも詩人にとって所与のもののように措定してしまう態度もまた含まれている。

こうした課題は中国現代詩の現在と不可分なものであるが、当然それは民国期を中心に活躍した詩人たちに見いだしていなければならない問題でもあった。それは早くに竹内好が指摘したテーマとも関わるが、そうした研究も近年では「国民国家」と「国民文学」をキーワードで、主に 1920 年代の詩人たちを扱った鄧捷氏の『中国近代詩における文学と国家』（お茶の水書房、2010）があるくらいで、ほとんど未着手であるといってもよい。今回の懇話会は、中国近現代詩研究をめぐる様々な課題が未解決なまま浮き彫りになるような催しでもあった。

(naomiki@hiroshima-u. ac. jp)